

23

## 中国医学「近代化」の試み： 蘇州国医医院（1939–1941年）の事例を基に

大道寺慶子

日本学術振興会

本研究は20世紀前半の中国医学がどのように近代化を試みたか、その実態を明らかにし、中国医学界が、国家及び同業者集団としての日本漢方医学界と、どのような関係を築いたかを考察する（以下、便宜的に中国の伝統医学を中国医学、日本の伝統医学を漢方と表記し、両者を区別する）。蘇州国医医院は、日本の中支那派遣軍によって樹立された中華民国維新政府（1938.3–1940.3）の統治下にあった蘇州市に開設された、中国医学の大型病院である（開設1939.4–1941）。創設・運営にあたっては、江蘇省省長・陳則民（1881–1951）の指示の下、中国人の医師たちが中心となって活動したが、彼らの医論や医学技術の確立に関して、日本漢方の医師たちとの交流が少なからぬ影響を与えていた点は、あまり知られていない。

20世紀初頭、近代西洋医学との折衝を経て、中国医学は自らの有用性を証明する必要に迫られていた。五四時期には、前近代的なものが急進的な知識人に攻撃される中、中国医学の廃止を訴える意見が優勢であった。だが1920年代に入ると、民族運動の高まりと連動して、科学をツールとして中国医学が民族的所産であることを立証しようという動きが現れる。その背後には近代医学の医師数の絶対的不足、コスト高、医療品の欠乏という、医療現場の問題も存在していた。こうした動きに呼応して中国医学の医師たちは、大型病院を設立し、そこで医学教育と医薬実験を行うことにより、自己の近代性を確立し得ると考えた。蘇州国医医院は、こうした構想に基づいた試みの一つである。だが、実際にどのような治療が行われていたのか、その実践が中国医学変遷の歴史においてどのように位置づけられるかについては、これまで着目されてこなかった。

これらの問題に対して、1939年に蘇州国医医院が発刊した『蘇州国医医院院刊 創刊号』が貴重な情報を提供してくれる。管見の限り、創刊号しか存在しないが、開院から半年ほどの間に来院した患者の性別、職業、年齢、診断名、転帰及び治療の詳細が記載されており、デモグラフィの再構築が可能である。また、日本漢方医の医論が翻訳されており、日中医学界がいかなる見解を共にし、また異にしたのか、知的交流の様相を伺うことができる。

この基礎資料を用いて、本研究では初めに、20世紀以降の中国における中国医学復興運動の大きな流れを俯瞰し、中華民国維新政府の下、蘇州国医医院が開設するにいたった社会的背景を把握する。次に臨床テクニックの再編を促した力学を、社会の動向にさぐる。『蘇州国医医院院刊 創刊号』に記載された、病院の構想および患者の症例誌から、近代西洋医学との競合、反帝国半封建というイデオロギーの抗争といった複数の権力が、治療の現場に働いていたことを明らかにする。続いて、こうした蘇州国医医院の活動に対して、日本漢方界がどのような見解を示したかを、当時の日本漢方を牽引した東亜医学協会（1935年設立）の記録を中心に調査する。中国医学界と日本漢方界が密に学知を交換していた様相から、国家の枠組みを超えた、同業者集団としての共同体が結成されていく過程が照射される。

以上の分析から、中国医学が、国家および患者を主体とする社会とどのような関係を築こうとしたのか、そして社会に求められる「近代的」な医療とは何かという問題について、日中の医師達がどのような見解を持っていたかが照射される。これらを総合的に包括し、蘇州国医医院の実践は、欧米、日本、中国の医療制度を取り入れたグローバルな医学の近代化の一試金石であったことを明らかにする。